

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳についての断章

山岡洋一

- 翻訳格付けあるいは翻訳ミシュランあるいは翻訳家の値うち
翻訳の質は判断しにくい。他の分野の例をみると、こういう場合には格付けという形で質に関する情報が提供されていることが多い。翻訳でも格付けを行うことができなからうか。

ひとさまの誤訳(2)

柴田耕太郎

- 『キス・キス』（早川書房刊、ロアルド・ダール作、開高健訳）
開高健の文学批評は辛らつを極めたと、諸処に書き記されているが、悲しいかな、翻訳については能天気であったようだ。誤訳・悪訳に満ち溢れている。

名訳

須藤朱美

- 土屋政雄訳『日の名残り』
言葉が「美しさ」を持つ訳書、土屋政雄訳『日の名残り』を紹介する。

名訳

山岡洋一

- 名訳の選択基準
名訳とはもちろん、すぐれた翻訳である。では、劣った翻訳や並みの翻訳とすぐれた翻訳の違いはどこにあるのか。言い換えれば、翻訳の善し悪しを判断するときの基準はどこにあるのか（翻訳通信第1期2002年3/4月号より再録）。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳格付けあるいは翻訳ミシュランあるいは翻訳家の値うち

明治の初期ならともかくいまの時代には、有名な作家はいても、有名な翻訳家などいるはずがないと思っているのだが、読書好きの知り合いと話しているとそうでもないかもしれないと思えることがある。何人かの翻訳家の名前がでてくることもあるのだ。そして、でてくる名前はだいたい共通している。話題になることが多い翻訳家、つまり少しは有名な翻訳家も少数だがいるようだ。

いまの世の中では翻訳家は無名に決まっていると思えるほどなのだから、少数とはいえ、少しは知名度がある翻訳家がいるのは嬉しいことだ。だが、問題もある。名前が知られているのは、たいていは訳書がベストセラーになったか話題になって、マスコミにときどき登場する人だ。翻訳の質がとくに高い人ではない。ところが、有名な翻訳家だから翻訳がうまいはずだと思われている場合が少なくないようだ。名前は知られていないかもしれないが、はるかにうまい翻訳家がいると話しても、なかなか信じてもらえない。

翻訳家の知名度は翻訳の質に反比例する……、そう言い切れたら痛快なのだが、事実はそうでもない。だいいち、無名で下手な翻訳者は山ほどいる。それに、ある程度有名な翻訳家のなかに、たしかに翻訳の質が高い人もいる。

実力がそれほどない翻訳家もてはやされているのを見ると、同業のひとりとして心穏やかでない場合もあるが、それより問題なのは、ほんとうに素晴らしい翻訳家がいるのに、それほど知られていなかったりする点だ。そしてもっと一般的に、翻訳の質が判断しにくいことに問題がある。翻訳出版ではとくに、一流のものも三流のものも区別なく同じ値段で売られているので、質の違いが判断しにくい。

もちろん、翻訳の質は読者が個々に判断すればいいという意見もなりたつ。だが、他の分野の例をみると、質の違いを判断しにくい場合には、質に関する情報が提供されていることが多い。

典型例が債券の格付けである。債券の安全性、つまり発行した企業や機関が倒産せずに元本と利息を支払ってくれる確率に関する情報の提供を専門にする会

社がいくつかある。そうした会社が格付けという分かりやすい記号を使って、安全性についての判断を伝えている。記号には格付け会社によって違いがあるが、一般的には上から順に A、B、C の三段階に分かれ、それぞれが Aaa、Aa、A などの三段階に分かれている（もう一段細かい分類もある）。債券を買うのはよほどの金持ちか、銀行や保険会社などの機関投資家だけなので、それぞれが債券の安全性を判断できる力をもつ専門家を抱えているはずだし、言葉の本来の意味での自己責任で投資しているのだが、それでも安全性に関する情報を第三者が提供する仕組みができています。

もっと馴染みのあるのはミシュランだろう。ギネスがもともとビール会社がパブでの話のタネとして発行したものであるように、ミシュランはタイヤ会社が旅行ガイドとして発行している。とくに有名なのはフランス料理店の質（とくに料理の質）を示すもので、星が1つから3つまでに分かれている。三つ星が最高級であり、1つであっても星がつくのは名誉なことのような。ミシュランの「レッド・ガイド」には毎年、4000軒以上が掲載され、そのうち星がつくのは500軒ほどという。星がつく店で食事をしたことなどないので、くわしくは知らない。だが、料理の質のように判断が主観的になりやすいものにも格付けがあり、100年近くも続いているのは面白いと思う。

もうひとつ、読書好きに馴染みがある格付けに、福田和也の『作家の値うち』がある。数年前に話題になった本で、100人の作家の600近い小説を読んで、100点満点で採点したものである。ワイン評論家のロバート・パーカーの『ボルドー』に範をとったものだという。ワイン・マニアではないので（そもそもアルコールを受け付けられない体質なので）、パーカー・システムといわれてもピンとこないのだが、福田和也は『作家の値うち』で、「作家をシャトーとみなし、個々の作品をヴィンテージ（生産年度）とみなして、作品ごとに点数をつけた」と説明している。債券格付けやミシュランが客観性を大切に、何人かの合議制で格付けを決めているのに対して、『作家の値うち』は福田和也がひとりでつけたものだ。こう書けば福田和也は怒るかもしれないが、主観的な判断を表に出しているように思える。だから、笑える部分もある。だが、大量に出版される小説のなかから、読むに値する

ものとそうでないものを見分けて読者に知らせるのは、文芸評論家にとって本来の仕事だ。文芸評論家なら全員で取り組んでもおかしくない仕事をひとりで行ったわけで、感嘆するしかない。

以上のように、質の違いを判断しにくいものについて、質の違いに関する情報を何らかの記号で示す仕組みや試みがいくつもある。たいていのスポーツのように成績が数字であらわせるもの場合には、格付けはそれほど使われない。質の違いが判断しにくいからこそ、格付けが意味をもつ。出版翻訳の場合には、部数という形で結果が数字になってでてくるし、だからこそ、ベストセラーの訳者がマスコミに登場することもあるのだが、部数と翻訳の質の間にはそれほど関係はないといえる。翻訳の質の判断に使える数字はない。何を基準に、どこに注目して判断すればいいのかすら、はっきりしていない。その意味で、翻訳はまさに格付けに適した分野である。

これまで、翻訳格付けが発表された例はないようだが、それはおそらく、手間がかかりすぎるからだろう。たとえば、1か月に100冊読むと豪語する福田和也でも、『翻訳家の値うち』を書くのは容易ではないはずだ。訳書だけでなく、原著も読まなければ書けないのだから、翻訳家100人の格付けには何年もかかるだろう。だが、人数を絞り込めば、翻訳の格付けも不可能ではないはずと思う。

では、翻訳の格付けを行うとすれば、具体的にどのようなものになるのかを少し考えてみよう。

翻訳格付けは何でないのか

翻訳の格付けがどういうものになるのかを考えると、それが何でないのかをみていく方が、おそらくは分かりやすい。

まず、翻訳格付けは翻訳書の書評ではないし、翻訳書の価値を示すものでもない。翻訳書の価値のうちかなりの部分は、原著の価値によるものである。原著の質が高ければ、翻訳書の価値も基本的に高くなる。原著の価値が低ければ、通常は翻訳書の価値も低い。翻訳の質は、翻訳書の価値を限界部分で左右するが、基本的な価値まで左右することは稀だ。このため、翻訳書の価値が高いか低いか注目していると、翻訳の質を事実上、無視することになりかねない。翻訳書の全体的な価値については判断せず、翻訳の質だけに絞るのが翻訳格付けである。

第2に、翻訳格付けは網羅的なものにはならない。債券格付けもミシュランも、対象の数がきわめて多いし、『作家の値うち』も100人の作家の60近い小説を対象にしているのだから、主要な作家は網羅しているといえる。だが、翻訳の格付けは少なくとも当初、網羅的にはなりえないだろう。何よりも時間がかかりすぎるし、共同作業になりにくいからだ。当初は、すぐれた翻訳家を対象を絞るしかない。ミシュランでいえば、星がつく翻訳家だけを対象にし、星がつかない翻訳家は対象外にするしかない。債券格付けでいえば、投資適格と呼ばれるBaa/BBB格以上に絞り込むしかない。福田和也の100点満点での採点でいえば、「再読に値する作品」とされる60点以上に絞り込むしかない。

第3に、これが肝心の点だが、翻訳格付けは誤訳の少なさを示すものであってはならない。また、「読みやすく、分かりやすい」かどうかを示すものであってはならない。この点については、2002年に書いた文章があるので、この号の最後に再録する。

日本語としての質

翻訳格付けは誤訳の少なさを示すものであってはならないということ、では誤訳が多くてもいいのかと質問されるかもしれない。だが、翻訳は面白い性質をもっていて、原文を忠実に訳すことを金科玉条にしていれば、誤訳や悪訳が避けがたくなり、訳すのではなく書くことを心掛けていけば、つまり「原著者が日本語で書くこととすればこう書くだらうと思える」文章を目指していれば、誤訳や悪訳が自然に少なくなる。

理由は簡単で、訳そうとするのではなく書こうとしていけば、文脈にあわない文章は書けなくなるからだ。翻訳は人がやることだから、原文を読み違える場合もある。だが、読み違えればたいていの場合、文脈にあわなくなるので、文章が書けなくなり、原文を読みなおすしかなくなる。原文の読みが間違えていても、間違いに気づいて再検討するフィードバックの機構がはたらくのだ。原文を忠実に訳そうとしていると、このフィードバック機構がはたらきにくくなる。読みを間違えていても、原文にはこう書かれているのだからと、文脈にあわない訳文を書く場合が多くなる。

もちろん、なかには思い込みがはげしくて、原文とは似て非なる文章を書く翻訳者もいる。いわゆる豪傑訳である。だが、豪傑訳は「原著者が日本語で書くこととすればこう書くだらう」とはいえない訳である。豪傑訳は例外だが、それ以外の場合には日本語としての質が高ければ、翻訳の質が高いといえるはずである。

翻訳は日本語としての質が高くなければならないという、当たり前ではないかという意見もあるだろう。たしかに、ある意味では当たり前である。日本語としての質を考えず、「原文に忠実」と称して英文和訳調の訳文を書く翻訳者はずいぶん少なくなった。だが、当たり前のことが当たり前に行けるとはかぎらないのが世の中のつねだ。たとえば債券格付けは、決められた利息と元本を決められたときに支払う能力と意思がどれだけあるかを示すものだ。元利をきちっと支払う。当たり前ではないか。だが、この当たり前のことができるとはかぎらないから、債券格付けがある。それと同様に、日本語としての質が高い文章を書くという当たり前のことができるとはかぎらないから、翻訳格付けが意味をもつのである。

では翻訳の日本語としての質を、どのように判断するのか。例をあげて考えていきたい。本来なら日本語としての質の高い翻訳を紹介して、その一般的な特徴を考えていくべきなのだろうが、ここではあえて逆の方法をとる。日本語としての質が低いのではないかと疑われる例を紹介する。その理由は2つある。

第1に、名訳についてはこれまでいくつも紹介してきたし、今後も紹介するので、繰り返しを避けたい。第2に、日本語としての質が高い翻訳はそれぞれ独特の個性をもっているが、日本語としての質が低い翻訳はどれも似通っている。だから、日本語としての質が低い翻訳の方が、典型例を指摘しやすい。

公開の場で個人を批判することには慎重になるべきだと思うので、固有名詞など、誰が訳したどの本なのかを示す手掛かりになる言葉は省略する。そして以下の例はどちらも、全体としては質が高い翻訳の一部であることをお断りしておく。質が高い翻訳にも、日本語としての質が低いのではないかと疑われる文章がある。そういう例として読んでいただきたい。もうひとつ、翻訳の質を考えるとときにならずしも原文を読む必要があるわけではないことを示すために、以下では原文を無視して、訳文だけで話を進めていく。では例を2つ紹介しよう。

(1) 、さいごに決まった下の娘の名はべつに愛称ではない。これは、わたしと彼女の父親との妥協の産物だった。

(2) 彼の三十六歳の誕生日である五月十八日、 は朝の五時に起き出した。

(1)は、「わたしと彼女の父親」はどういう関係にあるのだろうと考えてしまう文章だ。この直後に「夫」の意見がこうで、「わたし」の意見がこうだったと書かれている。ということは、「彼女の父親」は「わたし」の夫で、「彼女」は娘なのだろう。「原著者が日本語で書くとすればこう書くだろうか」と考えてみると、原著者ならよほどの理由がないかぎり、こうは書かないと思えるはずだ。

この点を確認するには、自分の家族にあてはめてみるといい。家族構成が違っているのなら、「彼女の父親」を「彼の父親」「彼女の母親」などに変えてみる。そう考えると、これがいかに奇妙な日本語なのか実感できるはずだ。「夫」ではなく、「父親」というからには、何か複雑な関係があったのだろうと思える。それに、自分の娘、それも生まれる前かその直後の娘を「彼女」と呼ぶことはまずない。だから、「彼女の父親」は二重に奇妙なのだ。

(2)は「彼」と が別人であれば、ごく普通の日本語だ。だが、読み進んでいくと、別人ではないことが分かる。「彼」は主人公の なのだ。 にたとえば「太郎」を入れて読んでみるといい。「彼の三十六歳の誕生日である五月十八日、太郎は朝の五時に起き出した」。奇妙な日本語ではないだろうか。「太郎は、彼の三十六歳の誕生日である五月十八日、朝の五時に起き出した」ならまだいい。だが、「彼の」はよほどの理由がないかぎり余分である。「彼の三十六歳の誕生日」と書く必然性があったのかどうか。

以上の例を取り上げたのは、どちらも、翻訳の質が高い小説の一節だからだ。どの本からの引用なのかに気づいた方ならおそらく、「翻訳の質が高い」という評価に賛成のはずだ。そしてこれは冒頭部分である。翻訳者ならだれでもいちばん慎重になるはずの冒頭部分なのだ。どちらも、原文に引きずられた悪訳である可能性が高い。

原文に引きずられないようにすれば、もっと違和感のない訳文になったはずである。もっとも、違和感なく読める文章がいいとはかぎらない。たとえば「わたしと夫との妥協の産物だった」と書けば違和感がない自然な文章になるが、半面、印象に残らない文章にもなる。どこかぎくしゃくし、違和感がある文章は、印象に残る文章でもある。だから、伏線にしたいとき、自然ではない何かを伝えたいときには、違和感がある文章を意識して使う場合もある。(1)はそういう効果を狙った文章である可能性もないわけではない。だから、

結論を急がず、じっくりと考える必要がある。

もうひとつ、「わたしならこうは書かない」とか「普通はこういう言い方をしない」というのは、日本語としての質が高いかどうかを判断する基準になりにくいことも確認しておくべきだ。文章家なら、「わたしにはこうは書けない」と感嘆する文章を書く。「普通なら思いつかない」表現を考える。だからこそ新鮮で力強い文章になる。これは当たり前の話だ。

こうした点を確認したうえで、もう一度、2つの例をみでみる。翻訳者が何かを伝えるために意識的にこういう表現を使ったといえるのだろうか。そういうものとして、この訳は成功だといえるのだろうか。

おそらく、どちらの問いに対しても、そうはいえないと答えるべきだろう。前述のように、日本語としての質が低い翻訳はどれも似通っている。似通っているのは、英文和訳で「正解」とされる訳し方があるからだ。たとえば his は「彼の」と訳せば正解、所有格の her は「彼女の」と訳せば正解である。この「正解」通りに訳すと、日本語としての質が低い訳文になる。これがいまの時代の翻訳の常識だ。だが、ひとつ前の時代には逆の常識があった。原文に his があるのに、「彼の」と訳さないのは間違い、「彼の」は不要だと判断すると、すかさず「訳抜けがあります」などと親切に指摘してくれる人がでてくる。「彼の」と訳しておけば安全、というのが一昔前の常識だった。

だから、「彼女の父親」「彼の誕生日」という表現は一昔前には正解だったが、いまの常識では下手のように見えるし、下手のように読めるものなのだ。下手のように見えるし、下手のように読めるから下手だといえるかどうかは分からない。世の中には下手とされる方法をうまく使う名手もいる。だが、「彼女の父親」「彼の誕生日」という表現がそこまで考え抜かれたものである可能性はきわめて低いと思うし、万一そうであっても、成功しているとは思わない。

ニューヨーク・タイムズ紙 2004 年 5 月 25 日号の読書欄に、「翻訳家の長い旅」という記事がある。ガルシア・マルケスのスペイン語・ポルトガル語の小説を英語に訳したグレゴリー・ラバッサという翻訳家を紹介した記事である。この記事にラバッサの発言が引用されている。「すぐれた翻訳はこうだ。ガルシア・マルケスの母語が英語だったらどう書いたかを考える。翻訳はそういうものでなければならない」。翻訳はそういうものでなければならないのだ。原著者が日本語

で書くとしたらどう書いたのだろうか。そう考えていれば、「彼の三十六歳の誕生日である五月十八日」なんぞという訳文にはならなかったと思う。

日本語としての質が低い翻訳はどれも似通っているが、日本語としての質が高い翻訳はそれぞれ独特の個性をもっている。日本語としての質が低い翻訳がどれも似通っているのは、英文和訳で「正解」とされる訳し方があるからだが、日本語としての質が高い翻訳がそれぞれ独特の個性をもっているのは、英文和訳の「正解」が翻訳では正解と限らないことを認識したとき、日本語の無限の可能性を活かせるようになるからだ。だから、「正解」を超えたところから、本当の勝負がはじまる。だが、いまの時代の翻訳に求められるのはまず、英文和訳の「正解」を超える姿勢である。この姿勢がどこまで強いかをみれば、翻訳の日本語としての質を判断する第一歩になる。

翻訳格付けはどういう形になるか

おそらく、『作家の値うち』の 100 点満点、債券格付けの Aaa から C までの大きく 9 段階の評価は、翻訳には適していないように思える。そこまで細かい評価をくだすのは困難だからだ。ミシュランの星なしから三つ星までの 4 段階評価が適切だと思える。そして少なくとも当初は、星なしは公表せず、星がつくものだけを対象にすることになるだろう。

債券格付けは基本的には債券の一つずつの銘柄に付けられるものだが、そこから、債券を発行する企業や国などの格付けも決まってくる。『作家の値うち』では、点数は個々の作品につけられており、作家の評価は示されていない。ひとりの作家でも、作品ごとの評価には極端な違いがある場合もある。たとえば高橋源一郎の場合、最高が 91 点、最低が 21 点である。

翻訳格付けでも、評価の対象は基本的に個々の作品になる。だが、ひとりの翻訳家の多数の作品をみていったとき、翻訳の質のばらつきはそれほど大きくない。三つ星の翻訳もあれば星なしの翻訳もあるという翻訳家はおそらくあまりいない。このため、少なくとも当初は、星は翻訳家に対して付けることになるだろう。たとえば 5 点以上の作品が三つ星に値するものであれば、その翻訳家の格付けを三つ星とする。

できれば、以上のような形で翻訳格付けを近くはじめたいと考えている。時間がある程度とれば、という条件がつくのだが。

『キス・キス』（早川書房刊、ロアルド・ダール作、開高健訳）

ロアルド・ダールの名前は、昔の 007 シリーズ『007 は二度死ぬ』の脚本家として知っていた。日本が舞台になり、ボンド・ガールに浜美枝、若林映子、日本の情報機関の長に丹波哲郎、ボンド役はショーン・コネリーだった。原題は You only live twice. これはイギリスの格言、You only live once. (しよせん人生は一度だけ - だからがんばろう) のダールらしいもじりだ。英国海軍中佐のジェームズ・ボンドが香港で中国美女とよろしくやっている最中、何者かに暗殺され、海軍のしきたりにそって海中に水葬される。ところがそれは敵をあざむくため、実は生きていてご存知の大活躍、という話だ。

このダールは御伽噺の作家でもあり『おばけだぞー』はじめ、子供に親しまれている童話が多い。だが彼の真骨頂は、なんといっても短編小説。The absolute master of the twist-in-the-table.(Observer 誌)という評もある。

そのダールだが、海外ほどは日本での人気は高くない。どうしてかと思議だったのだが、『キス・キス』の日本語訳を読んでわかった。訳文が悪いのである。訳者は芥川賞の選考委員にもなった開高健。開高健の文学批評は辛らつを極めたと、諸処に書き記されているが、悲しいかな、翻訳については能天気であったようだ。誤訳・悪訳に満ち溢れている。

大きな誤訳（文法的瑕疵：語法の無視/構文の取り違え/語義選択の誤り）と悪訳（原文と和文で理解の誤差が生ずるもの/日本語として不適切な表現/用語等の間違い）に分けて、『キス・キス』内の各短編を調べてみた。

	誤訳	悪訳	抜け
女主人	7	7	
ウィリアムとメアリイ	7	3	
天国への登り道	3	4	
牧師のたのしみ	6	21	
ピクスビー夫人と大佐のコート	11	15	
ローヤル・ジェリイ	14	5	
ジョージイ・ボーギイ	21	7	
誕生と破局	4	2	
暴君エドワード	26	12	1
豚	9	1	
ほしぶどう作戦	10	4	2

誤訳 118、悪訳 81、抜け 3、という結果だ。

今回は各短編よりひとつづつ誤訳箇所を選んで、検討してみる。

みなさんも、クイズを解くつもりでやってみてください。

* 各編につき、原文、開高訳、私のコメントの順。下線部は問題箇所。

その1 THE LANDLADY より

Briskness, he had decided, was *the* one common characteristic of all successful businessmen.

てきぱきとした態度こそは、成功した実業家すべてに共通した、ひとつの性格なのだと心に決めていた。

語法の無視：

「ひとつの」なら one でよいはず。the one(=only one)とあって、ご丁寧にも the に斜体がかかっている。

「あてはまる唯一の共通した性格」

その2 WILLIAM AND MARY より

If this is about what I am beginning to suspect it is about, she told herself, then I don't want to read it.

これが、どんなことを書いているのかしらとわたしが疑うようなものなら、と彼女はひとりごちた。私は読みたくない。

語法の無視：

what を the thing which に置き換え、二文に分解するとよくわかる。

This is about the thing. I am beginning to suspect that it is about the thing.

ととれる。it は抽象性が高く、代名詞 this をうける代名詞。

これはその事柄に関してのものだ。私はこれがその事柄に関してのものだとうすうす感じはじめている

「あのことだったらイヤだなと私が思っていることが書かれてあるのだったら」

その3 THE WAY TO HEAVEN より

'Be sure to miss it now if it goes. We can't drive fast in this muck.'

「飛行機がでるとしたら、間違いなく乗りおくれたらうよ。この霧じゃ車のスピードをあげるわけにもいまい」

語法の無視：

if 節の動詞が現在形、主節の動詞が原形なので、仮定法でなく単なる仮定を示す。

it は飛行機。Be sure to は主語 you を省きたいいかた。
「飛行機が飛ぶにしたって、今じゃ乗り遅れる」

その4 PERSON'S PLEASURE より

The men were staring at this queer moon-faced clergyman with the bulging eyes, not quite so suspiciously now because he did seem to know a bit about his subject.

三人の男はこのおかしなお月さまみたいな顔をした牧師をだいぶ疑惑の色のうすれた、いまにもとびだしそうな眼で凝視している。というのも、ボギス氏が家具の世界に少々明るいように思われてきたからだ。

構文の取り違え：

with は clergyman の様態を示す。not 以下は副詞句で were staring につながる。

(全文訂正)「三人の男はこのおかしな出目で丸顔の牧師をじろじろ見たが、家具についていささか知識をもっているのがわかったので疑り深い態度はひっこめた」

その5 MRS BIXBY AND THE COLONEL'S COAT より

This particular visit which had just ended had been more than usually agreeable, and she was in a cheerful mood. But then the Colonel's company always did that to her these days. The man had a way of making her feel that she was altogether a rather remarkable woman, a person of subtle and exotic talents, fascinating beyond measure;

いま終えてきた、こんどの逢引は、いつもよりたのしかったので、彼女はうきうきした気持ちだった。しかし、最近は、大佐の仲間がいつも彼女をそんな気持ちにしてくれるのだ。その男は、彼女に、自分は人目を惹く女で、繊細な、異国風の魅力に恵まれた、はかり知れないほど魅惑的な女性だという気持ちにさせてくれる。

語義選択の誤り：

company は 交際 (集合的に)仲間、で不可算名詞。friend のように具体的な誰かを指すものではない。ここを勘違いしたため、存在しない「大佐の仲間」「その男」を登場させてしまった。

(いま終えたばかりの大佐との逢引はとてもよかったので、彼女はウキウキしていた。)
「とはいえこの頃大佐と一緒にいるといつもそんな気持ちになるのだ。大佐は 」

その6 ROYAL JELLY より

Among the Bees in May
Honey Cookery
The Bee Farmer and the B. Pharm.
Experiences in the Control of Nosema
The Latest on Royal Jelly
This Week in the Apiary
The Healing Power of Propolis
Regurgitations
British Beekeepers Annual Dinner Association News
『五月の蜜蜂たちの中で』
『蜂蜜料理法』
『養蜂家と養蜂』
『ノーゼマのコントロールに於ける諸体験』
『ローヤル・ジェリイ新説』
『今週の養蜂場』
『はちにかわの効用』
『修復論』
『英国養蜂家の記念晩餐会』
『会報』

語義選択の誤り：

『修復論』は regurgitation を restoration と見誤ったか。
『みつばちの反芻』とする。

ほかは間違いではないが、業界誌の目次なのだから、それらしくしてほしい。

『はちにかわの効用』は訳されたのが 1974 年だから仕方があるまいが、『プロポリスの癒しの魔力』ぐらいに、『英国養蜂家の記念晩餐会』それほどおおげさなものではなからう、『年次記念パーティー報告』に、『会報』は『事務局よりのお知らせ』か。以下『五月の蜜蜂とともに』『蜂蜜クッキング』『蜂蜜療法のページ』『ノーゼマ管理の実際』など。意味は多少ズレても列挙・並列がすんなり読めるものにしたほうがよい。

その7 GEORGY PORGY より

It always ends at precisely the same place, no more and no less, and it always begins in the same peculiarly sudden way, with the screen in darkness, and my mother's voice somewhere above me, calling my name:

それはつねに正確に同じところで終り、多くなることも少なくなることもなく、また始まる時はいつも、闇のなかのスクリーンのように妙に唐突で、どこか私の頭上あたりから母の声が私の名前を呼んでいるのだ。

語法の無視：

「闇のなかのスクリーン」では、なにも見えまい。

in は状態を示す前置詞、darkness は総称用法で暗闇

(であること)。the screen in darkness は、暗闇状態にあるスクリーン「真っ暗なスクリーン」。闇のなかのスクリーン、なら闇は特定化されるので、the screen in the darkness

その8 GENESIS AND CATASTROPHE より

Also there was a rumour that this was the husband's third marriage, that one wife had died and that the other had divorced him for unsavoury reasons.

しかも、亭主のほうはこれで三度目の結婚だという噂が流れていた。前の細君は、ひとり死に、もうひとりとはつまらないことから離婚してしまったというのである。

語義選択の誤り：

unsavoury reason は「よからぬ理由で」。「もうひとりとはわけありで離婚した」

その9 EDWARD THE CONQUEROR より

The moment she'd spoken, she felt ridiculous, but not – and this to her was a trifle sinister – not quite so ridiculous as she knew she should have felt.

そういった瞬間、彼女はばかばかしい気になったが、いってこれは彼女にとってちょっといやだったが自分でもそれは承知していたので、そうひどくばかばかしい気はしなかった。

語法の無視：

(全文訂正)

「話し終わってしまうと、彼女はばかばかしい気がした。だが—こう思うのは自分でもちょっと嫌だったが—自分が感じるだろうと思っていたほどばかばかしくは感じなかったのだ」

should have p.p が理解できていない。すべきであったのに(過去の否定)(だったら)したことだろうに(過去の推量)のうち、ここでは

その10 PIG より

The news of this killing, for which the three policemen subsequently received citations, was eagerly conveyed to all the relatives of the deceased couple by newspaper reporters, and the next morning the closet of these relatives, as well as a couple of undertakers, three lawyers, and a priest, climbed into taxies and set out for the house with the broken window.

二人が殺されたというニュースは、三人の警官がつづいて感状をもらったことから、新聞記者たちの手によって、直ちに故人の親類すべてに伝わり、その翌朝、

特に近親の者たちは、二、三の葬儀屋、三人の弁護士、それに一人の牧師ともども、タクシーに乗って、この窓の破れた家へ馳せつけた。

語義選択の誤り：

無実の人を殺して感謝状をもらえるなら、ためにやってみたいと思う人ができるかもしれない。このcitation は「召喚状」ととるべき。誤認殺人で呼び出されたのである。

その11 THE CHAMPION OF THE WORLD より

He kept his head moving all the time, the eyes sweeping slowly from side to side, searching for danger. I tried doing the same, but soon I began to see a keeper behind every tree, so I gave it up.

しじゅう頭を動かして、視線をゆっくり左右にくばりながら、油断を怠らなかった。私もおんなじことをやってみたが、まもなく、どのかげにも番人のいることがわかってきて、途中で諦めてしまった。

語義選択の誤り：

see はこの場合「さとる、理解する」ではなく「が眼に入る」。いもしない番人が、怖いから何人もいるような気になるのである。「どのかげにも番人がいるように見えて」

英語を学びなおしたい人にとって絶好の再入門書

翻訳力錬成テキストブック

柴田メソッドによる英語読解

柴田耕太郎著

定価 10,290 円 (本体 9,800 円) A5 版・680p

課題の例文は定評ある 100 編の名文を選定
実践的な翻訳技術養成講座

日外アソシエーツ

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

土屋政雄訳『日の名残り』

芥川は『侏儒の言葉』の中で、「文章の中にある言葉は辞書の中にある時よりも美しさを加えていなければならぬ」と書いています。あるひとつの事柄を言わんとしていたのか、はたまた押し並べてこういうものだということもりだったのか、実際のところは知るよしもなく、読み手はさまざまに解釈することが許されています。この言葉を翻訳にあてはめて考えてみると、ここで言う「美しさ」が、翻訳と英文和訳を区別する要素かもしれないと思えてきました。

原語にあたる、辞書を引く、国語で書く。きわめて簡潔に言えば英文和訳とはこれを繰り返すことです。この作業方法に則り、訳出され、その後、印刷され、製本され、販売された本は星の数ほどあります。つまりおもしろくないと言われる運命を持った本です。悲しいことにたいていの本は増刷されることがありませんし、もっと悲しいことにはごくまれに、こういった本の中からベストセラーの生まれることがあります。運命を甘んじて受け入れた数万冊、運命を強靱にはねのけた数冊、どちらも読む人が読めば同じ駄訳書です。たとえ誤訳がなかったとしても、英文和訳の域を脱していません。辞書から抜け出したような単語が目につき、翻訳の範疇に入るにはいささか欠けている要素があるからです。つまり芥川の言うところの「美しさ」が欠如しているのです。

私がこんな生意気で憎らしいことを考えるのは、「美しさ」を持つ訳書を目の当たりにしてしまったからです。それが今回ご紹介する土屋政雄訳『日の名残り』という本。それでは例を挙げて見ていきたいと思えます。

As you might expect, I did not take Mr Farraday's suggestion at all seriously that afternoon, regarding it as just another instance of an American gentleman's unfamiliarity with what was and what was not commonly done in England. (原文ペーパーバック版 p4)

ご想像のとおり、あの日、私はファラディ様のお申し出を真剣には受け止めませんでした。なんと申しましてアメリカの方ですから、イギリスで普段行われていることと、そうでないことの区

別を、まだよくご存知ではありません。不慣れゆえのご発言であろうと、その程度に考えておりました。(カズオ・イシグロ著 土屋政雄訳『日の名残り』ハヤカワ epi 文庫 p11)

原文は様態を表す副詞節と分詞構文を伴った、第4文型の文章です。土屋訳ではそれを3つの文章にしています。文としてはやや長めですが、とりわけ難解な単語が含まれているわけではないので、訳す気になればできないこともないだろうと思える文章です。ところがいざ取り組む段になると、これが意外や容易ではありません。

まずなんとなく嫌な気を起こさせるのが、この分詞構文です。高校の英語の授業ではこの分詞構文を「and、but、when、because、with、if、as等のどれかに置き換えて考え、文章の流れが最も適切になるように訳す」と教わりました。屁理屈屋の私は思いました。and、but、although、when、because、with、if、as等の「等」って何なの。そもそもas自体、時や理由を表すことがあるのだから列挙されたwhenやbecauseと意味が重複する。だったらここで言うasは、whenやbecauseでカバーしきれない意味を指しているのだろうか。そもそも「適切になるように訳す」と言うけれど、それは原文が何を言いたいかわかっているから当てはめられるのであって、文章に何が書いてあるかなと読んでいる人間があらかじめ予想できるわけがないじゃないか。前後の文脈から判断することができるかも知れないが、それは読書として文章を読む方法ではない気がする。もっと根本的なところを考えれば、完全に言い換えられるのなら、なぜわざわざ分かりにくい構文を編み出して、嫌がらせのように文章を難しくする必要のあるのだろうか。言い方を変えているんだから、やっぱり多少の違いがあるのではないだろうか。

質問はと先生が尋ねました。この屁理屈を投げかけるのはさすがに気が引けたので、少し遠慮して「意味が二通りに取れるときはどうすればいいですか」と、無難な質問をしました。先生は、「まず『～しながら』と訳してみてください。確率としてはそれが一番高いので。それで駄目な場合は『～なとき』、『～なら』、『～だが』と当てはめていって意味が通ればそれが当たりです」と、答えてくださいました。分かっ

たというふうにならずきましたが内心、それはテストの解き方であって、英語を読む方法ではないなと思いました。

後に英文解釈というものを教わり、高校時代に習った分詞構文の説明が必ずしも間違いではなかったことを知りました。「分詞構文は and や if などのどれかに当てはまるという規則的なものではなくて、主文と分詞構文を日本語として自然になるようにつなげてやればいい。二通りに解釈できる場合はむしろ、ぼんやりとどうとでも取れるようにつなぐのが分詞構文の効果を反映した訳だと言える。また、and や but のような接続詞を用いる場合に比べて文語的な表現である」という説明を受けました。これで私の屁理屈は解消されたのですが、この「ぼんやりどうとでも取れるようにつなぐ」というのがことのほか難しく、つなぎめがくっきり浮き出た訳文になるのを避けられないのでした。

この分詞構文を、土屋氏は解釈をした形跡の見当たらない、なめらかな日本語に訳しています。これほど分詞構文を意識させない訳はめったにお目にかかれるものではありません。また、前から訳しているふうではなく、原文と訳文では言葉があちこちに飛んで、追いかけて読み比べるのはとても大変です。解釈がパンと前面に打ち出された、有無を言わさぬ日本語には頼もしささえ感じます。副詞、形容詞どちらにも取れる多義語の just は平易ゆえ余計に訳しにくい単語ですが、「その程度に」と力みを感じさせない表現になっています。

セリフの訳も印象的です。

‘Miss Kenton, I must ask you to leave me alone. It is quite impossible that you should persist in pursuing me like this during the very few moments of spare time I have to myself.’ (p166)

「ミス・ケントン。すぐにこの部屋から出ていくようお願いせねばなりません。私が自分のために費やせるわずかな時間まで、あなたにこんなふうにつきまとわれるとは、じつにけしからぬ話です」 (p235)

このセリフといい、先ほど例に挙げた例といい、原文はひじょうに客観的なものの言い方をしています。もともと英語自体、日本語に比べ客観的な描写方法を取る感がありますが、カズオ・イシグロの文章は米国

の小説とはまったく異なる、良く言えば慎ましく品があり、悪く言えば奥歯に物のはさまったような、どちらにせよ英国風情たっぷりの文体を採用しています。その文体をそっくり日本語に置き換えると、意味が伝わりにくかったり、きつい印象になったりします。たとえば例に挙げたセリフを直訳するとこうなります。

「ミス・ケントン、私を一人にしてくれるよう、どうしても頼まなければなりません。自分のためのわずかな余暇時間に、このようにあなたが追いかけてまわすなどとは不愉快です」

leave me alone を「一人にして」と訳したのでは発話者の感情が正確に伝わりません。「一人にする」という表現を日本語で使うときは、何か悲しいことや衝撃的なことがあって、感情をさらけだす姿を見せたくないから、しばらく一人にさせてくれと言うときに使う表現です。それを「どうしても頼む」というのでは、どことなくしっくりきません。それを土屋訳では「出て行くよう」という表現で拒絶を表し、must ask の強さを違和感のないものにしてあります。また、impossible という感情を述べる <it is that...should> 構文ですが、そのまま訳して判断を下すようなセリフにすると、苛立っている人の言葉とはいえ、ひどく横柄な印象を与えます。それが土屋訳では「けしからぬ話」という表現に変えられ、感情が抑えられていながら身の引き締まるようなセリフになっています。また、persist in pursuing me というミス・ケントンを主体にした表現は直訳すると「追いかけてまわす」となり、相手を正面から非難しているように聞こえます。この言い方では同じ人物のセリフとは思えない、無骨な印象を与えます。土屋訳のように行為の主体を発話者に変え、「つきまとわれる」とすることで、品がありつつ少し嫌味な雰囲気うまく伝わります。土屋訳にはこのように様々な角度で変化が与えられていて、言葉ひとつひとつが単語、単語の意味を越え、文章としてなめらかに結びついています。そしてそのなめらかな文章が読む者の心にずっと入り込んでくるのです。

名訳の選択基準

「翻訳格付けあるいは翻訳ミシュランあるいは翻訳家の値うち」の資料として、翻訳通信第1期2002年3/4月号の記事を再録する。

名訳とはもちろん、すぐれた翻訳である。では、劣った翻訳や並みの翻訳とすぐれた翻訳の違いはどこにあるのか。言い換えれば、翻訳の善し悪しを判断するときの基準はどこにあるのか。

たぶん、こう考えたときにすぐに頭に浮かぶ基準は、2つあるはずだ。ひとつは、誤訳が少ないことという基準だ。もうひとつは、読みやすいこと、分かりやすいことという基準だ。

だが、この2つの基準はどちらも、明治以来の伝統である「後進国型の翻訳」を前提にしたものであり、いまの時代には相応しくないとと思う。いまの時代に相応しい基準は誤訳が少ないことでも読みやすいことでもない。「原著者が日本語で書くとすればこう書くだろうと思えるものになっているか」と考える。

誤訳が少ないこと、読みやすいことという2つの基準がいかに根強いのか、どういう形で翻訳が話題になるかを考えればすぐに分かる。雑誌記事や本などで目につくのは、「あなたも翻訳家になれる」といった学習者向けのものを除けば、誤訳の指摘だ。たぶんいちばん有名なのは『翻訳の世界』に20年にわたって連載されていた別宮貞徳の「欠陥翻訳時評」だろうが、ごく最近でも『文藝春秋』に誤訳指摘に記事が掲載されたり、資本論の誤訳を指摘した古い本が復刊されたりしている。誤訳指摘はつねに一般読者の関心を集めるようだ。

もうひとつの読みやすさという基準は、雑誌の記事や本のテーマになることはまずない。しかし、たとえば翻訳書の書評で翻訳の質が取り上げられるとき、誤訳の指摘でなければ、たいていは「訳文はこなれていて読みやすい」といった申し訳程度の一文が最後に付け加えられる形になっている。それに、仲間うちで本の話をするとき、翻訳物のときは、「読みやすかったよ」が褒めるとき、決まり文句、「難しくてね」か「読みにくかったよ」がけなすときの決まり文句になっている。

後進国型翻訳とは

この2つの基準がどちらも「後進国型の翻訳」を前提にしているという、いったいなぜなのかと疑問になるだろう。なぜそういえるのかを論じさせば、大論文になってしまうので、かいつまんで説明するに止めよう。

明治以来、日本は翻訳によって欧米の進んだ知識や技術を取り入れる方法をとってきた。外国語で学ぶのではなく、翻訳によって母語で学ぶ方法をとった。欧米各国を除けば日本が世界ではじめて近代化を達成で

きたことと、やはり欧米各国を除けば、日本が世界でもめずらしく、母語で高等教育をすべて行える国であることが無関係だとは思えない。日本は欧米列強の植民地にならなかったごく少数の国のひとつであり、この点で、翻訳はきわめて大きな役割を果たしたといえるはずである。

だが、欧米の進んだ知識や技術を取り入れようと必死になっていた時期、欧米と日本の文化の差は極端に大きかった。欧米は理解などとてもできないと思えるほど遠い存在だった。そして、言語の違いも極端に大きかった。理解などとてもできないと思えるほど遠くむずかしい知識を、しかも極端に構造や性格が違う言葉で書かれた知識を、どうすれば取り入れることができるのだろうか。

この難問にぶつかったとき、日本にはすでに異質な文明、進んだ文明から学ぶ伝統があった。日本は中国や朝鮮半島の進んだ文明から1000年以上にわたって学んできた伝統があった。そのときにとられた漢文訓読の方法を応用して作られたのが、いわゆる翻訳調である。

その後、翻訳調が通常の日本語に影響を与えて近代日本語とでも呼ぶべきものが形成され、翻訳で作られた語によって日本語の語彙が豊かになったうえ、翻訳に使われる文体や語彙も近代日本語に近づいてきた。このため、翻訳の日本語と普通の日本語の違いはかなり薄れてきたといえる。だが、翻訳が漢文訓読に近い方法で行われてきたことの影響は、いまでも随所に残っている。

なぜ誤訳に関心が集まるのか

影響のひとつは、翻訳というものの役割に関する見方にみられる。

理解などとてもできないと思えるほど遠くむずかしい知識を、しかも極端に構造や性格が違う言葉で書かれた知識を、ほんのわずかでも理解できるようにすることが明治以降の翻訳の役割であった。翻訳者に期待されていたのは、理解することなどとてもできないはずの原文を、原文の表面を、忠実に訳すことであった。

漢文訓読について考えてみると、正解はひとつしかないと思えるはずである。言葉というものはそれほど簡単なものではないので、漢文訓読でもじつはいくつかの答えがありうる部分が少なくないはずだが、少なくとも英文和訳と比較すると、正解はひとつと考えられる部分のはるかに多い。これと同様に、漢文訓読に似た方法で翻訳を行っていたとき、正解はひとつしかないと考えられたのはそれほど不思議ではない。

ごく最近まで、翻訳者はエリートであった。お国に

選ばれて欧州に国費で留学し、帰国後には文字通り終身雇用の職を与えられ、十分な給与を保証されていた人たちが翻訳にあっていた。社会的にも経済的にもきわめて恵まれた地位を保証された文字通りのエリートだったのだ。エリートには義務がある。その義務とは、欧米の進んだ知識や技術を日本語で伝えることであつた。

だからこそ、誤訳はあってはならないことだったのだ。エリートなら、ひとつしかない正解をしっかりと示して義務をはたしてほしい。外国語を読み解く(つまり、欧文訓読の訳文を作る)ことができなくて、なんで恵まれた地位を得ているのだというわけだ。

だが、誤訳の指摘を喜ぶときの背景になっていた状況は、いまではほとんどなくなっている。いま、誤訳が話題になるのは、他人の間違いを指摘するのが面白いからだ。尻馬に乗って鼻高々になりたいという読者がいるからだ。要するに読者の醜い根性を刺激するからだ。

なぜ読みやすさが基準とされるのか

読みやすさに関心が集まるのは主に、後進国型、欧文訓読型の翻訳に対する拒否感からである。後進国型翻訳では、漢文訓読型の文体を使い、漢語を基にした難しい訳語を多用するので、訳文がどうしてもむずかしくなる。そのうえ、理解などとてもできないと思えるほど遠くむずかしい知識を学んでいるのだという自惚れがあるので、訳文が不必要に「難解」になる傾向がある。

翻訳書を読んでさっぱり理解できなかった本が、原著を読めば簡単に理解できたり、英訳を読んだらなんのことはなく理解できたという話はたくさんある。この結果、翻訳が「難解」なのは、もともとむずかしいことが書かれているからでもあるが、それ以上に、翻訳によって不必要に「難解」にされているからであることが理解されるようになってきた。そこででてきたのが、読みやすさへの要求である。

読みやすさを求める声が強まったのは「難解な」文章に対する拒否反応であり、当然のことだし、健全なことでもある。だが、これが当然だし健全だといえるのは、後進国型の翻訳が蔓延しているという条件があるからだ。いまでは、そのような条件は消えかかっている。欧文訓読型の翻訳、「難解さ」を売り物にする翻訳が少なくとも主流ではなくなつたいま、それでも読みやすさを求めるのは、読者の知的好奇心、忍耐力、能力が低下しているためだろう。知らなかったことを学ぶ喜び、考えてもいなかったことを考える喜び、感じていなかったことを感じる楽しみを得るのがそもそも、読書の目的であることが忘れられているからだ。

原著者が日本語で書くとすれば.....

誤訳が少ないこと、読みやすいことという2つの基準がどちらも後進国型の翻訳を前提に生まれたものであり、その条件がなくなつたいま、どちらかといえばおぞましいものになっているとするなら、どのような基準で翻訳の質を判断すべきなのか。その答えが、「原著者が日本語で書くとすればこう書くだらうと思

えるものになっているか」である。

なぜこれが基準になるかは、2つの角度から論じることができる。第1は、読者として翻訳書を読むときに何を期待するかという角度である。第2は、翻訳者の使命という少々理屈っぽい角度である。

第1の点は、簡単に理解できるはずだ。奇妙なことをいうようだが、いまでは翻訳書を読む理由はそれが翻訳書だからではない。面白そうな本だから、興味のあるテーマを扱った本だから、話題の本だから、好きな作者の本だからなど、理由はさまざまだろうが、翻訳書だからではない。いまでは翻訳書も翻訳ではない本も、読者は同列に考えている。同じものとして比較している。同列に考えて比較したうえで、本を選択する。後進国型の翻訳の時代には、翻訳書だというだけでありがたがられていたのだが。

翻訳書もそうでない本も同列に考えて比較するのだ。翻訳書だから.....という考え方は成立しない。翻訳書だから内容がすぐれているとはだれも思わないし、翻訳書だから文章が少々おかしくても我慢して読もうとはだれも思わない。翻訳書もそうでない本もおなじ基準で判断する。

もちろん、本の価値を考えるとときの基準はひとつではない。たとえば小説の値打ちを判断する際の基準は何かと質問されれば、だれでも答えにつまるはずだ。だが、翻訳書の値打ちを翻訳という観点で評価する際の基準なら、たぶん、ひとつに絞り込むことも可能だろう。日本語としての質が高いかどうかである。

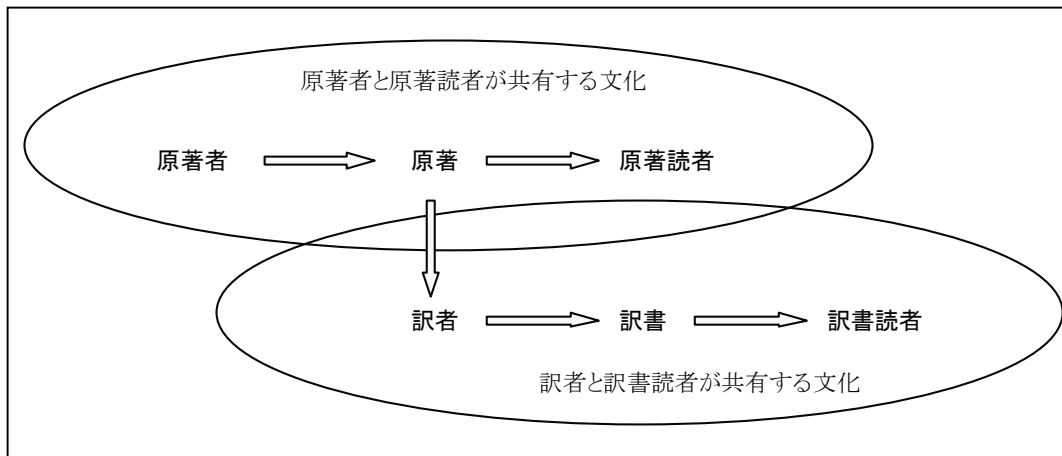
日本語としての質が高いとは、たとえば小説の翻訳であれば、小説として喜んで読める日本語になっていることである。経営書なら経営書として喜んで読める日本語になっていることである。日本語としての質が低い本は、読む気がしない。類書がない本など、いまやなにもに等しいので、日本語としての質が低い本を読むくらいなら、類書を探そうと考える。

そして、日本語としての質が高い翻訳とは、「原著者が日本語で書くとすればこう書くだらうと思える翻訳」と言い換えられるはずである。

第2の翻訳者の使命という観点について簡単に記しておこう。

翻訳とは何か、翻訳はどうあるべきかを示す理論がないのか、さまざまな翻訳論を検討してきたが、いまのところ、どうやらそんな理論はないのではないかと考えるようになってきている。欧米で書かれた翻訳論のほとんどは、印欧語族という近親関係にある言語の間の翻訳を前提に書かれているようで、欧米語と日本語の間のように違う語族の間の翻訳には役立たないように思える。日本人が書いた翻訳論の方がはるかにすぐれていると思えるが、それでも翻訳理論と呼べるようなものがあるとは思えない。

そこで、翻訳とはどういうものか、翻訳者の使命は何か、日頃の仕事のなかで感じている点を基に考えるしかない。大雑把な印象として次ページのような図式を思い浮かべる。



書くという行為は、すべて読者を想定して行われる。実務文書はもちろんだが、どのような本も記事も、どのような論文も、読者に向けて書かれている。詩であれ、純文学であれ、どのような純粋芸術であれ、この点に違いはない。例外的に読者を想定しない文書がないわけではないが、そのような文書は翻訳の対象にはならない。だから、読者という観点、受け手という観点がない翻訳論は読むに値しない。

送り手と受け手の関係は、言語というものの本質にかかわるものであり、翻訳にかぎられたことではない。だが、翻訳には、送り手と受け手の関係が二重になっているという特徴がある。この二重性という特徴を考えると、翻訳に比較的近いものは演劇や音楽などの舞台芸術ではないかと思える。翻訳者は、作曲家が書いた楽譜を音という形で表現して聴衆に伝える演奏家や、劇作家が書いた戯曲を演技して観客に伝える役者に似ているといえる(ちなみに、翻訳と一括りにされることが多い通訳は、一部の例外を除いて、この関係が二重にはなっておらず、したがって、本質的な違いがある)。

演奏家や役者との類似から、「すべての翻訳は解釈である」という原則が導き出される。翻訳は解釈である。翻訳者は原著の読者であり、原著を読み、解釈した結果を母語で表現する。したがって、唯一の正しい翻訳というものはいない。ひとつの作品を10人が翻訳すれば、10通りの訳ができる。そして10人がすぐれた翻訳家であれば、10通りの訳のすべてが正解である。

だが、演奏家や役者とは違っている点もある。たとえば演奏家なら、作曲家が書いた楽譜を音に転換する。楽譜と音では、伝達手段としての性格に大きな違いがある。これに対して翻訳者は、外国語で書かれた文書を母語で書かれた文書に転換する。外国語と母語にももちろん違いがあるが、楽譜と音の違いほど大きくはない。そして、現在の著作権法の制約(後進性というべきだろうが)から、古典を除けば、翻訳は1回限りという性格をもっている。ひとつの原作で何通りもの訳ができることは通常はない。

このような事情から、翻訳者は訳書の読者にとって、原著者の代わり、代理人という性格を色濃くもつことになる。このため、「原著者が日本語で書くとなれば

こう書くだろうと思える翻訳」が要求されている。

翻訳の難しさ

「原著者が日本語で書くとなればこう書くだろうと思える翻訳」とは、たとえば小説の翻訳なら小説として読める日本語でなければならないことを意味する。当たり前だし、簡単ではないかと思えるかもしれない。だが、これは簡単なことではない。

「原著者が日本語で書くとなればこう書くだろうと思える翻訳」とは要するに、翻訳書と日本語で書かれた本とが、日本語の質という点で、対等な立場で競争関係にある事実を認識したものである。たとえば小説の翻訳なら、作家と日本語の質の高さを競争しているのである。一流の小説の翻訳なら、一流の作家と比較して遜色のない日本語になっていなければならない。

ところが、翻訳者は作家と比較して、圧倒的に不利な立場にある。作家なら、自分が感じたこと、知っていること、調べたこと、書きたいことを、自分の語彙の範囲で書けばいい。ところが翻訳者は、原著者が感じたこと、知っていること、調べたこと、書きたいことを、原著者の語彙で書いた結果を訳さなければならない。翻訳者は、感情や感覚や認識や知識が違い、語彙が違う原著と格闘する。これが翻訳の楽しみなのだが、苦しみでもある。

もうひとつ、原著で使われた言語と訳文に使う言語の性格の違いという問題がある。この違いによほど敏感になっていないと、外国語の影響を受けて、母語の言語感覚が狂ってくる。翻訳には、外国語の世界と母語の世界との間で、意識的な二重人格を作りだす必要がある。意識的な二重人格が破綻しないようにするのは、容易ではない。だから、翻訳はむずかしい。名訳と呼べる作品はそれほど多くはないのだ。